



和漢文操

辨類 類  
類類 頌類  
論類 頌類

五

中村俊定文庫  
文庫 18  
195  
5



近藤  
藏記

和漢文撰

和漢文撰卷之五

○琴貝類

四季の琴貝

藤巴雀

中村侯定文庫

水口

春のうららかなるに花もさかすや  
夏はあつたに花もさかすや  
秋はあつたに花もさかすや  
冬はあつたに花もさかすや  
春のうららかなるに花もさかすや  
夏はあつたに花もさかすや  
秋はあつたに花もさかすや  
冬はあつたに花もさかすや





のまればしるもさねなをばらも明なればせくおひ  
 年もまらぬしきくの雲をばらしるもさねな  
 も對の神也。から舟の浦のまね人をもくし  
 るあはれもさねなをばらしるもさねな  
 けしちとくしるもさねなをばらしるもさねな  
 てしと海をばらしるもさねなをばらしるもさねな  
 そのまらぬまらぬ。手紙もくしるもさねな  
 桐のまらぬのまらぬしるもさねなをばらしるもさねな  
 とはくはらぬのまらぬしるもさねなをばらしるもさねな  
 婦まらぬまらぬのまらぬしるもさねなをばらしるもさねな

標る馬もはらぬしるもさねなをばらしるもさねな  
 眞のまらぬしるもさねなをばらしるもさねな  
 しるもさねなをばらしるもさねなをばらしるもさねな  
 まらぬしるもさねなをばらしるもさねな

○註曰●怨歌行新製齋純素皎潔如霜雪●王建詩輕  
 羅小扇撲流螢○秋扇ノ詩歌數多アリ奉止乃ハス  
 ▲鞍馬山ノ神各門ノ行ト緋トノ各町ナリ海申モ神谷緋トアリ  
 ▲美川以下ノ四人ハ中古ニ浮世繪ノ名人ナリ ▲清サ知言ヲ控  
 子帛ニ扇骨ノ珍キヲ答ルト云ハレシ扇ノ云ハレシケ  
 のしるもさねな ▲高僧傳ニ法顯ニ燕ノ天竺ニ渡リ六見  
 白絹扇ヲ不覺遺下云或抄ニ中啓ノ詔アリ後勅スレ

○百人二一... 長恨... 雪夜詩... 盧仝... 禪錄... 扇子上...  
 ○百人二一... 長恨... 雪夜詩... 盧仝... 禪錄... 扇子上...  
 ○百人二一... 長恨... 雪夜詩... 盧仝... 禪錄... 扇子上...

○論語... 玉帛... 詩經... 掌據... 鶴鳴... 蓬萊... 寧儉...  
 ○論語... 玉帛... 詩經... 掌據... 鶴鳴... 蓬萊... 寧儉...

○評... 例の辨利... 此の... 此の... 此の...  
 ○評... 例の辨利... 此の... 此の... 此の...

こころしつゝかゝるる意すの取也しつゝいこころしつゝ礼の取  
るる事の時地と稱さしつゝかゝるる事の時地と稱さしつゝ  
とて心まの誓調とてあくる断續の法もこころ  
るるく起程の法もこころにあらしつゝ也

圓珠貝 並序

僧馬泉

いふより我のく麻と和訓をすすあゆまして  
和れをさるるに圓珠貝と和訓をいふるあゆ  
まらかゝるるいと能階の書はよる圓のこころ  
まゝの洋もさるる此はも歌も麻と和訓  
かゝるる音訓のよるいふあゆまらかゝるる  
松陵

圓珠貝も孔明の羽扇もさるる圓とすゆれあ  
も二つの名ありとさるる一はれは和のありあ  
ゆまらかゝるる圓とすゆれあゆまらかゝるる  
かゝるるかゝるるゆまらかゝるる

具珠貝

礼云樂云  
時鳥又腫  
信玄 叙甲  
母乃 追蚊  
團離名前  
拂塵 隠ル  
兒玉 写紋  
無常 崇佛  
郊 卷 明 曙  
招 風 讀 文  
胡 馬 益 鳳  
有 意 然 君

若化<sup>レ</sup>去<sup>ラ</sup> 駕<sup>セヨ</sup>言<sup>シ</sup>遊<sup>シ</sup>云<sup>ニ</sup>

○註曰論語ニ礼樂ノ二句ハ明ニ出タリ ▲軍史ニ甲斐ノ信玄ノ  
 床ルニ腰ヲ掛テ軍配ヲ収セル國ハ信州ノ中嶋ニテ謙信トノ  
 軍ナリ△兒玉堂ハ關東ノ武士ナリ團ヲ以テ統トセリ ●工藤  
 詩益作秦王女夢<sup>ト</sup>香向<sup>ニ</sup>煙霧<sup>ニ</sup>良註<sup>ニ</sup>言益<sup>ニ</sup>此<sup>ニ</sup>於<sup>テ</sup>扇上<sup>ニ</sup>以<sup>テ</sup>香  
 之<sup>ヲ</sup>香<sup>モ</sup>亦<sup>モ</sup>風<sup>也</sup>列仙傳ニ秦穆公ノ女ナリト ▲和泉ノ宗廟寺  
 建立ノ時ニ行基菩薩ヲ道守師ニ奉<sup>テ</sup>本尊ヲ團信<sup>ノ</sup>上<sup>ニ</sup>安置  
 玉<sup>ヲ</sup>支<sup>アリ</sup> ●恋<sup>ニ</sup>此<sup>ニ</sup>君<sup>ト</sup>ハ班<sup>ナ</sup>女<sup>ヲ</sup>怨歌行ヲ云一<sup>リ</sup>之<sup>明</sup>ニ出タリ  
 擲<sup>ス</sup>ニ此<sup>一</sup>對<sup>ハ</sup>聯句<sup>ニ</sup>底<sup>区</sup>ノ古法<sup>アリ</sup>テ無<sup>ト</sup>有<sup>ラ</sup>對<sup>シ</sup>常<sup>ト</sup>戀  
 ヲ對<sup>ス</sup>又<sup>無</sup>常<sup>ト</sup>ハ和歌ノ續キニ俳文<sup>ニ</sup>字<sup>對</sup>ノ絶妙<sup>ト</sup>稱<sup>ス</sup>  
 一<sup>レ</sup> ●詩經<sup>ニ</sup>邶<sup>ノ</sup>風<sup>ニ</sup>駕<sup>言</sup>出<sup>遊</sup>云

○評云けつろと有は名の和訓あり一字も漢文の語脈と  
 夫つも他借し叶韻の證とあり一はれん字より音訓の  
 所由と或を團と稱しと音より或を團と稱し  
 訓より或と愛より仰の訓とより一戀と團とに  
 字對ありこれより款文の用ありて今よりけつろと  
 仰文とをさく一作者は笑の山中と書けりや却て  
 東花坊と稱して柳羽世の子とか少ありやよめを  
 入事とを此とあるは院に信よりて我、真言の字匠也

神寶

長江集

世間一毎の世とよあはれん命とて世とよあは





○評云けびと例の敏捷よりしてははるよきたかきし  
 を一室の稱するふと貪名の袖とみんらと袖を此  
 貪とあらねりとの儒仰の万美よりを名の二にあらむ  
 況するあらむとこそを能信の微中よりを名ははれ  
 とや又より一弁を夫と虚空を非と仰の起結  
 觀音文とと高常學廢と文中の字をこそとゆめん  
 あらむに遺教の知足といふて貪福の二字と措けり  
 近くと一篇の親連とくさ遠くと百々の名詞といひ  
 作者を長野身よりして越の新修といはれ程とこそと獅子  
 つの親身よりして鑑きの西襲より二南人の所より梅子  
 とはし

花に賛

蓮二云

五子白

繫而不

蓮二云

とあはれそ作といふ

○評云けびと例の敏捷よりしてははるよきたかきし  
 を一室の稱するふと貪名の袖とみんらと袖を此  
 貪とあらねりとの儒仰の万美よりを名の二にあらむ  
 況するあらむとこそを能信の微中よりを名ははれ  
 とや又より一弁を夫と虚空を非と仰の起結  
 觀音文とと高常學廢と文中の字をこそとゆめん  
 あらむに遺教の知足といふて貪福の二字と措けり  
 近くと一篇の親連とくさ遠くと百々の名詞といひ  
 作者を長野身よりして越の新修といはれ程とこそと獅子  
 つの親身よりして鑑きの西襲より二南人の所より梅子  
 とはし

洛の地をみ葉のふちより

大正十一年

之類圖類

東華坊

世傳醋吸之圖者塩梅儒教老之之道而  
 酸其耳其苦共所謂人之好不好與乎然  
 厚有世界謂物教奇事而飽不有耳子不  
 有苦子奚麼月夜之未飽則為鮮其飲而  
 譽少所酸了也增而好細豆人看其其為  
 體臭尔哉孰厚謂道之是矣孰厚謂道之  
 非矣致乎異端斯害也已抑謂太極之道者  
 從本一即之道也其公千車万馬之歧而或

看打鳴念佛之鈕宛或者橫倒參禪之棒  
 宛此耶尔者詭虛了彼耶尔者詭實了儒  
 家結五常之垣則佛門張五戒之綱而互  
 斷性來之道則老子者說手振千貫而割  
 牛了折衝了為家天地而鏡麼不餅特擴  
 我好之道與所率哉謂佛諾之道者級合  
 之家之意味而塩梅和漫之风雅了則人法  
 者從孔子之誦讀居心法者傳教子之虛靈  
 些又法者效在子之形容歷然則非儒了  
 非佛了不構老在揚墨之一城了假令謂

親迎孔子之御經共知言語之用與無用  
了則其虛廢合點之其實廢合點之何益  
可美暗許之黑豆泉矣從言而嗜人極廢  
欲熱而遊者俳諧之談笑也乍去棄人之  
味線而遊芳野山之花了。藤難波浦之  
以而頰茂之頰茂之頰茂于月于雪也則立  
合點人取之憂名而成累學文之日備也矣  
二子能察我言之虛實而學而思之思而  
學之知今日之用與無用則元買博豐干  
之饒舌而看破獅子庵之遺稿矣爾有則

所謂之人行則必有我師焉合點文殊之  
智惠集此圖者頰佛老之內證而可謂  
俳諧一字之邦物矣夫

○註曰醋吸三聖公世多手圖ナリ近ハ繪本抄ニ註解アリ  
△俳諧拾芥何レ月夜ニ粟汁末湯ト云ルハ末飯ナリト  
△及ハ米飯ト平話ニ讀レ△異端ハ論語ノ全文ナリト按  
スレテ諸公故字又俗字ノ論アリ孔子ノ意ヲ察スレバ道ハ家々  
ノ建流アリテ佛老モ揚墨モ一理アレハ辟言ト我々家ノ建立ニ  
自ラ答テ他ヲ毀ルハ宜ニ怒リテ責ムカラストフテ先後抄  
ノ取意ナリ△五常五戒ハ儒佛ノ制法ナリ細本スルニ及  
ハス△老子ニ對テ折衝云天地家モ其理ヲ取意ナリト按スルニ



往テ西僧ヲ殺セシト豊干鏡古并陀ト云テ靈ノ前ヨリ逃去リ又  
ト鏡古トハ口ニメテト夏ナリト云テ人行ノ語論語ノ全文ニハト人殊ニ  
智恵ノ夏ハ細峯ニ及ス人寄ハ文殊ノ智恵トハ本朝ノ國語  
ニテ孔子詢ノ起結ナリト擲スニ子以下ハ豊干ノ鏡古ニ語ヲ  
起シテ寒山拾得ノ風狂ヲ以テ豊干ト向在ト云ハ三類ノ秘  
訣ハ此段ニ有破スレ然レハ今ニテ類ハ國相命ニ半身ノ像  
アリテ東華坊ト運ニ房ト渡部在トナリ其國ハ大和詞  
ノ首トニ出タリ

○譯云け國を椰子庵の遷行ありて或は之作の語あり  
或は運ニの類ありありるれは原書の有り也  
あぬむくくつじくも漸くゆりれむとふじむの得い  
むく五虎井の拍ねきくり尾峰のを庵くく國と

写し其との心証をいそと國一で當付し又幅り  
七幅もある一はれけ國の中擧とつくと難沖遠快  
と祖名の命とあひく純潔の世法と百世ノ傳人此  
いああもしよと作の大任ちるり椰子庵くお秘の  
遺稿とほくして今や天下の公道とあれると類と削の  
所師と師として合點のうまにけ賛と膏煎まきく  
まういれ子の依常とらとて定本の一字とあちけつ  
るく斎捨の用とまうつとらとを片おくと削の適切

路身賛

金李潭

可く一近花帝の御書原より一紙とて新朝此

本朝書

十一



の帝一様とむとひる文の断後とらんも言也作者は  
 蓮の唐詩と書を今言其の能人あり

〇頌類

枚子頌

伊東恕

昔と云に食行のたの中に食と天として才とあるの  
 い釈迦孔子のハ千余巻も毛燭西施と十二おし  
 吟るれをるはくぬあむげお我おのけしちうも  
 天の浮橋のむおし婦はまがけむらぬあくお葉は  
 一枚子のもほやうりあまの心をと感あうぬ天神

七代も地球又やととをうまいたとまはく人の代あふ  
 家たさくまりて餅搗のゆあぬの張く新葉の  
 のこもあうまうて自身入るはねりもはけおとらうも  
 べふ時あしはれをうさ右の所りうねいさし左陰の  
 とよもをゆて久我殿の産がりおまもあけく柄枚ら  
 枚子ら此言第もむのう一たるは能治のれ用と論を  
 おむしもうらおと連系北東の中うも久くも長あ知照  
 するの味増塔の事話とあるありはれやみ雲雲あううお  
 てるらん葉のあうら。枚のふものりもみまをたぬ殿  
 のおあまうり者持帰子の心流うもくつをわの中

大徳寺

十四













○辨類

之上辨

僧文竹

世にから歌とてあそぶ人のご上のひとちあまの  
 鞍上松と厠とてやあそぶ一轍一月夜老とら  
 ちひきさのたれあらしのきよきあしりては  
 七阿そきまらちん没中軍中しあそと様とて詩と  
 事とらるの結のしんせかくやうあそ或は松と連  
 よさくぬとるおのあそとあそとあそとあそとあそと  
 ちとらとねとらとあそとあそとあそとあそとあそと

福家のゆげちりるはらもあそあそあそ松の上  
 くと結のあそとあそとあそとあそとあそとあそと  
 遊子のあそとあそと松上の寒夫婦のあそとあそと  
 ありーはらと厠とてあそとあそとあそとあそとあそと  
 とあそとあそとあそとあそとあそとあそとあそと  
 きーあそとあそとあそとあそとあそとあそとあそと  
 身あそとあそとあそとあそとあそとあそとあそと  
 へとあそとあそとあそとあそとあそとあそとあそと  
 のらららあそとあそとあそとあそとあそとあそとあそと  
 ちとらとあそとあそとあそとあそとあそとあそとあそと

辨類

僧文竹

坊に... 妙きもの... 仰座... 歌書... 六十帖... 後... 仰

○註曰△婦田録思案文字在... 陸放翁夜雨... 長雪隱ノ向ニ蘭丸ヲ持テ...

○評云け辨と娘毒のふけ... 源氏の親おし合せり... 湖南の松...

愛管辨

苗草院

あま... け... 辨... 湖南...







人のくちん怪むと愛の深さなりありし所あり。戦  
ふらんらん。なす不存とあるあれ梅とあり  
けしとあり。わのむれもより来あり。ゆめや

○註曰▲松双身。くちんとあり。上正統とあり。ゆめや  
余婦のくちんとあり。あり。▲左傳。衛懿公好鶴  
乗。軍。云。▲史記。楚頂羽歌。力。技。山。今。氣。益。云。時。正  
利。子。雖。不。逝。が。唐。今。唐。今。秦。若。何。云。身。江。八。敗。軍  
ノ地ナリ。▲唐。玄宗。ノ。夏。八。前。二。出。タリ。▲國。文。今。夏。八。大。平。記。ニ。ナリ  
相撲八道ノ遊ナリ。●長恨歌。驚破霓裳羽衣曲云  
▲晋史。王羲之好鵝。為。山陰道士。采。道。使。經。換。鵝。携。歸。云  
▲東鑑。ニ。云。銀。作。梅。枝。之。贈。物。西。行。上。人。上。我。領。之。於。行。北

典。放。遊。題。子。兒。▲編。年。通。論。之。庵。居。士。伴。子。天。昭。女。隱。居  
深山。賣。竹。簾。離。結。朝。食。▲女。祭。邑。中。佳。尾。詩。今  
之。仲。景。中。古。猿。万。年。之。琴。今。毛。德。下。桐。以。子。作。し。り。り。王。美。之  
愛。行。一。日。與。他。君。哉。ト。云。一。り。 ▲日。記。ト。八。尊。手。声。二。日。星。射。引  
ト。余。勸。々。長。キ。ヲ。ニ。老。ノ。引。導。ト。テ。世。秘。藏。ス。古。本。ナリ。梅。ス。ル。ニ  
兮。字。ハ。和。漢。ノ。助。語。辭。ニ。分。明。ナ。ス。又。シ。先。師。ノ。大。和。詞。ニ。イ。フ。云。  
ヲ。ノ。釈。文。ヨリ。始。テ。和。訓。ノ。用。ト。成。レリ。譬。之。ハ。永。用。ノ。詞。鑑。ニ。い。い  
モ。い。の。モ。通。ニ。難。久。回。ハ。ト。増。テ。書。法。ナ。シ。然。レ。ハ。今。字。ノ。和。訓  
ヲ。得。テ。大。和。ノ。當。用。ヲ。稱。ス。キ。ナリ。▲詩。文。ニ。私。尊。氏。在。尊。氏。老。尊  
ト。八。尊。ノ。尊。ナリ。▲金。鑑。ニ。金。水。鳥。ト。尊。ノ。名。ナリ。○古。今。集。上  
あ。と。み。り。喜。々。山。元。ノ。神。所。を。と。り。あ。ら。い。な。松。林。  
そ。の。お。も。わ。ら。い。き。こ。あ。ら。い。り。武。託。露。濃。ト。云。フ。古。又。ナリ。ト。フ







とふしまた、（一） 従志の一字と後志の一字とを補依めんと  
あつても、世あるものなる。模の一字とともつて  
従志の二字と後志の一字とを補依めんと  
一、（二） 従志の一字と後志の一字とを補依めんと

○註曰△文選客難事方朔曰如朝等所謂避世於朝侯  
之間者何也何也深山高岸之下也△異同集云盧生  
即郭林之友也知之所行細等二及之△色石見  
獲屏積其皮壁漫圍其形避郭云陸佃曰  
然則以避瘧之事為食惡夢之謂說狄子梅スルニ  
節序紀源モテ模ノ論アレト林ノ本口ニ書キ来テ昔野  
ハ模ノ觀音モアリ諺ニ流テ故云ヲ用レシ△方岳蘇トハ

假名遣う百本カラ依志古風ノ題トトテ文ヲ昇下セシテリ  
○傳云け辭々官記よりして後依志の二字とより公私の二用  
と云々とももきり物とて後一人和の履字とゆんき  
けり又傳の慶海と云れり一移と一作者を紀載  
堀田氏あり濃南のは阜一後と那合下の四宮社  
公卿の解力より能流とありて官内大臣有りのを也

○説類

木履説

藤之任

中世に木履の（一） 名も履とて後之行者此らあり神園  
の灯りありはしつれ牛にありの燈も履いよ人切の



觀音勢至の流とくやまもくせいのりやん

そふらりる

○註曰▲設行者イテ元亨教書ニ傳アリ本復ノ言又ハ別書ニ尋又  
 へし▲本朝軍史ニ平忠盛カ吹燃ラ抱留えんをモ▲牛若丸  
 ノ千人切モ世ノ知レリ所ニテ細拳ニ及ハス▲梅檀香樹ハ仁延  
 説ナリ本復言モ又ハ寓言ナリ▲重ヨリ落る人末仙人  
 ナリ諸書ニ在リ細拳ニ及ハス ▲玉鏢ハ道人松詞ニ撰ルニ  
 盲人ノ書ハ寶ノ玉鏢ト松ヲ重キテ金ト云イ馬博共ト云ハ  
 ル文ノ新續ハ更ニシテ此等ヲ錯綜ノ絶妙ト稱スレ ▲晋史ニ  
 謝美運好及登山嘗着木履上山去前齒下山去  
 後齒▲晋史或人直詣阮孚見其蠟屐歎曰未知  
 一生當着幾量屐 ▲五帝以下リ軒妻ニテハ保氏ニ

夕負美ノ歌入ナリ其書ニ見レト撰スニ錦山路ハ若クニ日ヲ  
 覆ヒテ帝ニ水ヲ灌ク故ニ多ハ木履ヲ帝ナリ此等ヲ諧語滑稽  
 ト知レレ ○古今伊勢ノあきなる竹の音 あきなる川ぬらも  
 あきぬちあきもせよからりり柳をそあきぬる ○吹れそ  
 ちきとをけるくそんおきおるむのこきりちうらん  
 △平康延草木園土志皆成仙▲法を延ノ電女成仙ノ段ニ  
 亦成男子ノ言又ナリ細拳ニ及ハス

○語云けふとなく詭射とけく下好より後よりなり  
 とく所古語と好し漢ノ唐歌あきんやきると  
 伊勢ノあきぬらり人ノあき其の次々ときめ梅よ哀糸  
 の花とらんとてに法笑の詭譎とまねや作者伊勢  
 由りし尾の柳下ノ嘉道を或いあ中の用と撰りて又





梓のちもきもあつたはしつたのちのち  
山川の梓とまねとまよの神の後  
ほこもわらわらとまねとまよ

○註曰易繫辭黃帝下斷木為梓堀地為向は梓  
世後瑞二易辭上富言言三黃帝始ラ云はヤ△梓  
後發ハ行勢古記より前ニ出タリ ●東坡句詩 鑿金  
混泥也△後成之△ふもやとこのつらりののち  
りらりやまにあかあか△論語 思也知也  
●班固の明歌ハ前ニ出タリ△漢中明名是陳おのり  
とまよとまよとあり△三皇記 山川乃とまよ  
れよまよとまよとまよとまよとまよ

○漢云は説を全く誣諸して昔帝のち  
さかのとらまよ虚説あまよとまよとまよ  
も虚入とまよとまよとまよとまよとまよ  
まよとまよとまよとまよとまよとまよ  
て辨ははまよとまよとまよとまよとまよ  
作をと伊勢のまよとまよとまよとまよとまよ  
以雅とまよとまよとまよとまよとまよ

暉五説

東花坊

けあしご代の風雅ありしを視と暉不はしつた  
暉語しつた暉語を我まよとまよとまよとまよ

らねるなり一子眠午を茶坊ありて今のみまを  
 ねる色せしむ寝の風雅を眠る一子のあり  
 まるねむり地をねむり人うねむり月をよねむり  
 して地をねむり月をよねむり天地人うねむり  
 天地人のありねむり月をよねむり月をよねむり  
 のしむ色次し月をよねむり月をよねむり月を  
 よねむり月をよねむり月をよねむり月をよね  
 一のありねむり月をよねむり月をよねむり月を  
 よねむり月をよねむり月をよねむり月をよね  
 ねむり月をよねむり月をよねむり月をよね  
 ねむり月をよねむり月をよねむり月をよね

つひもけふののれと睡りわくあら茶入るるの  
 まる一はれいそお森ありしひのみ下めりまを  
 いつらういそとけ一籠をかすりの色

○評ふけ説を虚説あり一解く五河の茶と寝る御のま  
 く御のまをくくをと名説の書用といふ一さら下けい  
 越のまの清く石階夜う寝る一向の新茶をうら  
 月をよねむり茶好の名言とかりと作すは茶の語説といは  
 るら茶とるの蔵言とて一茶の起説とてあへりん  
 として註解の筆をうらもつて文を向きの用とて

捨難説

陳素六

むうかぬらね頼朝とる茶挽茶おりのたん

さらさらひらひらとさうも振いてさあせく<sup>△</sup>境<sup>ツツ</sup>の  
 振おこらあつて殿のさあつてをそれより七郷  
 といふにきつてはむ軍のはむら<sup>△</sup>園<sup>ツツ</sup>ちけ此  
 危しきおゆれい餅米の殿とやうにさうに  
 枚子うけ<sup>チキ</sup>振ありあつてさうにちけ  
 名もれあつて<sup>カイキ</sup>振餅とさうにさうにさうに  
 といふ餅<sup>キ</sup>念<sup>キ</sup>おたりつてさうにさうにさうに  
 さうにさうにさうにさうにさうにさうに  
 といふ名のお用とさうにさうにさうに  
 といふおれちけさうにさうにさうに  
 といふおれちけさうにさうにさうに

其のいら較宗のはむらさうにさうにさうに  
 といふ風流とさうにさうにさうに  
 といふさうにさうにさうにさうに  
 といふさうにさうにさうにさうに  
 といふさうにさうにさうにさうに  
 といふさうにさうにさうにさうに  
 といふさうにさうにさうにさうに  
 といふさうにさうにさうにさうに  
 といふさうにさうにさうにさうに  
 といふさうにさうにさうにさうに  
 といふさうにさうにさうにさうに  
 といふさうにさうにさうにさうに

△川内はくちとまゝなつお舟とよふぬも又さう  
 けふらふらふさふらふくささめお高のめでたきふらけの  
 舟子とてあはくちにいづかしくあはくちくさくさあまは  
 のめあつめらふちゆうけいさほらふさあまはあまは  
 はししししきしきやまはるれ色くしあまはきよめあまは  
 藤ふあまおの秋もくも餅ふゆ糖のふて代ふふ富ま  
 自在と文ふゆりしお舟とよふも餅のふはくちいしお秋  
 りふも餅のふあまはくち換餅をふはくちいしお節け  
 唯清くささく身ちうたはくちいしおわらわ  
 ○註曰△東鑑千葉、竹常胤、鉄、堀、殿、殿、殿、或説堀、殿、殿

心えゆ豆ヲ用ユトク△定家婦ハ頼家公ノ和歌ノ師ナリ入道後  
 ニ鎌倉君ニ下リ玉フ夏アリトム換ルニ此段ハ定家婦ハ假名直  
 ノ撰ルニヨリいきくぬいへノ論ヲ設テサト撰トニ用ヲ顯ハス  
 去ルハ先師ノ和詞ニ和詞ニ假名直名ノ兩用ヲ知テ六峰ノ明又  
 古アリトハ世等ノ女子美ヲ云ルニヤ △店九ノ竹いさしきあ  
 せふちゆうきにかいめらぬささきとむしとあり ○地のは  
 ありとらてかからきり新屋のあしさいせのぼり秋  
 △白川夜舟より俚語ミテ夏モ知ラヌ夏ノ形容ナリ 換ルニ  
 一辨別名以下ハ冬ニ錯綜ノ術アリト云シ去ハ難波ト云イ行執カト  
 云イ善悪ノ所法ノ太駭ナルモ早竟ハ音ノ二字ミテ前後ノ用ヲ  
 結ハントナリ然レハ蔵頭ノ格ニ似テ此等ヲ云フ夢ノ絶妙ト稱  
 スヘシ △古樂所奏レ唱歌ニテ落ルカクさきさきなを荷しくわも

八下

十一

多しのふ富も自在夏加あつせのふやとあり

○海云は海を例あつて七名の巾にけい解と新し  
いまくの通を詔し柳の風情とたふさるこれくは  
他借の名詠うして目らうとらひ口らうとらう一  
の結文と終とて一きとていふお子のそと空柳も  
の富言うとてあつん作をたけけのそと空柳も  
或と京師にけい或とと屋城にけいちりと陳と新し  
依り部と氏とてまきを屋城下の能名ちけいそと  
一軒ふ名の風をとりつ

文抄巻之五終

